

『教義に関して信徒に聞く』試訳(3)

岡村 祥子

自分の記事の反響にニューマンが驚いたということは、彼の精神の単純さを証明している。教育水準の高くない学校出身の反対者たちは、その単純さをいつも腹黒さと取り違えていた。

「consultと言う言葉の擁護者は成功しなかった...その言葉は『ランブラー』に神学について書いた信徒を弁護するために使われたものと理解され、『ランブラー』の前任者を擁護する論拠として使われたに過ぎない」と考えた7月3日付けの手紙でウラソンは書いた。ジョンソンの辞書を引用して、英語でもラテン語でも、その言葉の第一義は「忠告を聞く」ということで、ニューマンはそれを比喩的で、二義的な「考慮を払う」という意味で使っていると、彼は主張した。

マニングは9月22日付けの手紙で反応しているが、その穏やかで同情的な調子は、後の展開に照らしてみると特に興味深い。「図書室で交わした『ランブラー』の記事についての会話を何度も思い出します。教会での聖霊の働きについて説教を書いて出版されたらよいと思います。そこで、『ランブラー』で「歴史において」一般読者を混乱させたものを「神学において」明らかにすることができます」と。

喧嘩好きなジロウ博士が、今回は、ローマの布教聖省の長官ベディーニ大司教に手紙を書いたニューポートのブラウン司教と再登場した。彼はバーミ

ンガムとロンドンのオラトリオの不穏な影響力から始めている。そこでは「昔からのカトリック」よりも改宗者がいっぱい、プロテスタント的な考えや感情を助長する一方、「改宗者にはきわめて重要なカトリック精神の養成はほとんど望めない」と書いている。

次に『ランブラー』の記事に言及し、本文の75ページから77ページの問題の議論を取り上げている。ブラウン司教が「ニューマン博士の意見への反論を出版すべきだ」と手紙の中でジロウ博士に提案したと述べているが、「ニューマンに答えようと考えたが、当局のもっと高位の人が返答すべきものに関わるなと忠告されたので、ジロウは『不満足な返答を受け取って』という題で、ニューマンに書いた」と返事してきた。「多分、ローマ教皇庁がこの一件を扱うのが最善です。改宗者の中で最も優れているとみなされる人が、今ではカルヴィン派が書いたものとみまがう主張や議論を出版するのを見るのは非常に辛いことです」と。返事はなかった。それで司教はジロウのこの手紙について、10月30日付けの手紙を送り、そこで、ニューマンの命題と証明を詭弁的で、不正直だと述べるだけでなく、明白な信仰の影響に関する論文の最後に出てくる議論を「先行するどのようなものにも劣らず、いや、ある点ではそれ以上に悪い」と非難している。

彼はジロウの手紙からの抜粋も取り入れている。ジロウは、この記事で「現代のもっとも警告すべき現象」とし、「昔からのカトリック信徒に、何を信頼すればよいかわからなくさせている」と言った。また「この記事のために、昔からのカトリック信者と改宗者の溝がいつそう大きくなった。私には改宗者たちがカトリック教会の中に受け入れられて以来、その溝を大きくし続けてきたようにさえ思われる。彼らは党派心が強く.... カトリックの出版の主要な部分を手に入れた。もし、今のように、亀裂が大きくなり続けるならば、将来、悲しい結果を見ることになるだろう」と述べている。

ブラウン司教の三番目の手紙では、問題にされた文章がラテン語に訳され

ている—これが神学的正確さをいっそう期するためだと考えると皮肉なことだ。というのは、彼は「司教の集まり」をCorpus Episcoporumとまた、「一般の協議会」をConcilia Oecumenicaと訳し、ラテン語の意味で取ると、実に異端すれすれといえるかもしれないからである

布教聖省がこの件を取り上げ、その年の終わりにウラソン司教がローマに滞在した折、彼はバルナボ枢機卿とその件について意見を交わした。枢機卿はブラウン博士の手紙を見せて問題の箇所を示し、「これはサンスクリット語ではないね」と言うことで、「あの箇所を彼は完全にわかっていると私は思いました」と言い、「教皇がひどく苦しんでいる」と付け加えた。ウラソンはバルナボの要請を受けて、ニューマンの注意を向けさせることを約束し、1860年1月イングランドに戻るとすぐに実行した。ニューマンはウラソンと会ってローマ在住のワイズマンに1月17日付けの手紙を送り、その中で異議を唱えられた箇所のリストとバルナボ枢機卿の読んだ訳のコピーと、抵触すると思われる教義上の命題とを送るよう依頼した。そうすれば、ニューマンはこの教義上の命題を受け入れ、守ることを公言し、また、この教義に従って彼の議論を厳密に説明し、教義が原文とまったく矛盾しないことを明らかにしようと約束した。

ニューマンの手紙を受け取ったとき、ワイズマンには「司教区や教区民と関係のある少なくとも12の懸案があり、できるならローマを去る前に解決しなければならなかった。」この手紙が明らかにしているのだが、これらの懸案が心に重くのしかかり、彼は論争の理由を十分理解できなかった。

『ランブラー』の最近号に大いに心が痛む。ウラソン博士がニューマン博士との和解の使命を受けている。もし彼が望むなら、ニューマンは適切な記事を書くだらう。私はできるかぎり穏やかにまた円満に話してきたが、私にはわからないので根本の問題にはまだ触れていません。」その後「この手紙ですっかり疲れてしまった」と付け加えているのは意味深長である。し

かしワイズマンはニューマンの要請を布教聖省に伝えたにちがいない。というのは、『ランブラー』の記事の異議をはさまれた箇所をリストを、1月30日に彼は受け取ったからである。彼はこのリストをニューマンに渡さなかったので、ニューマンは5月7日にマニングから手紙を受け取るまで、何も聞かされていなかった。その手紙には次の一節があった、「枢機卿からよろしくとのこと。また彼が戻るまで待つ方がよいとっておられます。その時手紙の件であなたが納得できる解決をしたいと望んでおられます。」

しかし、ニューマンはワイズマンからもマニングからもそれ以上何も聞かず、1861年6月にはローマも苛立ってきた。バルナボはウラソンに「ニューマン神父は約束にしたがっているだろうか。あなたは『ランブラー』の最近の記事についてどう思うか？」と手紙で尋ねた。ニューマンが何故その時その場で、直接返事ができなかつたのか理解しがたい。その代わりに、1862年の冬、ウラソンがもう一度ローマでニューマンのために「ことをおさめよう」としていることが手紙からわかる。1867年5月にオラトリオ会のセント・ジョンとビトルストンの両神父がローマを訪れたとき、ようやく事態は転機を迎えた。

「あの時から、あらゆる種類の疑惑と中傷が、私についてまわった。また、オラトリオ会の学校の創設以来、疑惑と中傷はいや増し、学校に対しても向けられた。...これほど不当な扱いをする社会から身をさける」とニューマンは書いた。

彼がどの程度身を引いていたのかは、1874年の覚書からうかがえる。『ランブラー』の論争が起こった1859年まで、彼はほとんど、一年に一冊、本を書いていた。その時から1874年までに彼が書いたのは3, 4冊である。「1859年から1864年まで私が書かなかったのは『ランブラー』での失敗に原因がある。窮地に陥ったので、沈黙すべきと私は思った。もしタルボット枢機卿(大司教)がローマの代弁者であるなら、ローマの人たちも同じように思っ

ているということだ。というのは1867年『アポロギア』に言及して、彼は、私について『彼が書くことをやめたので、厄介払いができたと思っていたのに、何故また書き始めたのか』とアンブローズに言った。私の宗教活動について、タルボットが1867年に考えたことを、私自身は1860年にすでに予想していた。」

ニューマンが誇張していなかったことは、同年のタルボットのマニング宛の手紙でわかる。その手紙はノーフォーク卿を中心とする200人ばかりの信徒が署名したニューマンへの請願文に関するもので、請願文には「あなたに向けられるあらゆる攻撃はこの国のカトリック教会に傷を与えるものと感じている」という文章が入っていた。タルボットは手紙の中で、「もしイングランドの信徒を抑えなければ、彼らが聖座と司教たちにとって代わり、英国カトリック教会を支配することになるだろう」と言っている。

『ランブラー』の記事以来「ニューマン博士の上には暗雲がかかっており、それ以降彼のどのような著作も、その雲をはらしていないのは確かである。」信徒について、「彼らは本性を見せ始めている....ニューマンが『ランブラー』の記事で教えた教義を、彼らは実践しているに過ぎない」とタルボットは続けている。それから、あの有名な問いを投げかけている、「信徒の領域は何か。狩猟し、矢を射、楽しむことだ。このようなことなら彼らは理解するが、教会に干渉する権利はない。このニューマンの事件は完全に教会のことなのだ....ニューマン博士はイングランドでもっとも危険な人物である。司教方に反対するために彼が信徒を利用しているのがおわかりであろう。」

1867年4月、オクスフォードにオラトリオ会の家を創ろうとして生じた誤解を解くために、ニューマンはセント・ジョン師とビトルストン師をローマに送った。この訪問の目的は、まず、ニューマンの正統性と忠実を立証するためであった。すぐにランブラーの記事の件が持ち出され、「私たちがここに来たのは、この心に疼く苦しみを明らかにするのに非常に役に立ちました」

とビトルストンはニューマンに手紙を書いた。ローマの神学者、ペローネの忠告で、ニューマンは、今度何か書くときに、異議を唱えられた部分に意識的に説明を加えることに合意した。というのは、イエズス会の神学者で、後に枢機卿となったフランツェリンがローマ大学の講義の中で、この記事を神学的に告発したからである。1871年ニューマンは『4世紀のアリウス派』の3版を出版し、付録にノートVとして『ランブラー』の記事の省略版をのせ、フランツェリンの反論にひとつずつ反駁していった。もっとも、事件は1867年セント・ジョン師によって、ローマが満足する形で決着したように見えた。

1871年版の変更は更に意味深い。教える教会の機能が一時停止し、司教団が信仰告白をしなかったという非難を扱っている箇所が慎重に改正され、誤りは修正され、出典が加えられ、いくつかの論争上の出典は伏せられていた。聖バジリウスの迫害と教皇ダマススによって疑われ、冷たく処遇されたことに関する言及は削除されたし、「教える教会がいつの時代にも、教会の不可謬性の有効な手段とは限らない」という主張も、信徒の耳は司祭の心より聖なるものだという聖ヒラリウスの告発も削除された。

信徒の信仰の証明はそれほど極端に縮小されはしなかったが、誤りは修正され、出典はいっそう正確にされ、英語版からの引用は伏せられ、重要なだけに怒りを駆り立てるような文章を強調するのは差し控えられた。ローマの人々の動揺に関するいくつかの言及は省略されたが、抹消されたものでもっとも重要なのは、アリウス派の迫害が、ノヴァティウス派とカトリック教会との統一を生みそうになったとする言及である。その箇所は次のとおりである。「というのはこの両方とも、神性にたいして同じ感情を抱いており、共通の迫害をうけることになったので、両教会の人々は共に集まり祈った。カトリック信徒には祈りの家がなかった、というのはアリウス派の人々が教会を奪い取っていたからである。」

ランブラーの一件は、ニューマンの心に深く残っており、そこから非常に

重要な二つの教訓を引き出した。第一は、霊的、知的な活力を獲得するためにカトリックの司祭と信徒に必要とされる自立に関わることである。この力によって人々は時代精神から守られ、教会は改宗者を迎え入れるのにふさわしい場となる。布教聖省体制が英国の教会を支配している限り、この自立は決して実現されないとニューマンは考えるようになった。

「この時代の教会は特殊である。初代であろうと中世であろうと前の時代には、今おこなわれているような極端な中央集権化は存在しなかった。神学者個人が何か自由に言うと別の神学者が答えた。論争が起きるとその論争は、司教、神学者集団、または外国の大学に及んだ。聖座は最終上訴の法廷に過ぎなかった。今や一司祭として私が何かを出版すると、布教聖省が即座に答える。腕にそのような鎖をまかれて私はどうして戦えようか。ムチに追い立てられて戦うペルシア人のようである。初代や中世の学派には真の個人的判断が存在した。しかし今や学派も（宗教的な意味においての）個人の判断も言論の自由もない。即ち、知性の働きはまったく存在せず、前時代の知的伝統によって体制は続いているだけだ。」

1859年にシンプソンも同じことを指摘したが、ニューマンの場合は分析をさらにすすめて、聖職者と信徒それぞれの働きと身分の変化を、特にフランス革命の結果とした。伝統的に信徒は聖職者の保護者であり、忠告者であった、「私たちの司祭はフォーブル・サン・ジェルメンのサロン風の口調や作法とボスエやフェヌロンを思わせる知性を身につけて帰ってきた。彼らは「自立した紳士」であった.... その当時、主に個人の中にあった力強さは、今では、規則と組織に求められなければならない。違った才覚、教育、生まれの聖職者が、教区の統一体、即ち絶対的指示への問答無用の服従と行政的統一によって、個人の力不足を補わなければならない。」

ニューマンが気づいたように、この組織の行き着くところは神学的配慮を必要とする事柄が、外交的に評価されるということだ。即ち、良い印象を与

えるか、悪い印象を与えるかとか、苦痛をもたらすか、楽しみをもたらすかという観点から評価された。敗北の報いはもはや決定的な公的非難ではなくて、「日陰者の人生」という終わることのない挫折感であった。1863年に次のように書いている、「布教聖省とは誰か、ほとんど一人の頭の切れる実業家で、昼も夜も働き、東へ西へと仕事をすばやく片付ける。」

ニューマンが「復権した」1867年にローマで起こったことを、アンブローズ・セント・ジョンは鮮明に描き出し、特に、あたりは柔らかいがすぐにかつとなる布教聖省の長官、バルナボ枢機卿についての描写から、ニューマンに対するあの裁定が納得される。英国が、このローマの司法権から解放されたのは1908年6月29日であった。その過去の事件は、マニングの朝のミサに出なかったことでニューマンが教皇への従順さに欠けているのではないかということであった。バルナボは温情と責任逃れの間を揺れていた。バルナボは、セント・ジョンの言うところの率直な心情に動かされて、あるとき、「マニングを一番よく知っているが、ニューマンが好きなのだ」と言った。彼の秘書のカパルティ司教は同じ見方をされていて、オクスフォード大学のカトリック教徒の扱い方に対する解決策は「告解を聞くための良い司祭を送るべきだが、ニューマンはだめだ。彼では信徒を助長することになる」であった。セント・ジョンが口をはさもうとするが、「これで全員賛成だね。全てはさようならという言葉で決着が着く。総大司教が待っているのですね。これで結構。今晚、枢機卿に会うのだろう。」という言葉で会話は終了した。

外交術の必要性と神学とを識別することに失敗したので、ニューマンは再度現状の類似点を初代教会に探すことになった。このことからニューマンは二つ目の、しかも彼の宣教の目的であったが、前よりいっそう重要な教えを得た。

アリウス派の異端の発展が英国国教会の発展と対応することを発見してニューマンは改宗することになった。教会の十全性という考えに反対する

人々の態度の中に、今度は初代教会のノヴァティアニズムの種があることを彼は見抜いた。「目下の事態は違ってはいるが、10世紀と同様疲弊している。私たちは、初代の教皇たちが激しく戦った異端のノヴァティアニズムに落ち込んでいっている。世界的な力になることを目指すよりも、自分に引きこもり、親交の範囲を狭め、思想の自由を恐れ、戦士の高揚した精神を持って征服にでかけるよりも、将来に対して絶望と幻滅の言葉しか用いない。」この精神は、ニューマンの以前の弟子、W.G.ウォードに体现された。彼はダブリン・レビューの編集者で、カトリック信徒を教育するニューマンの方法と提案に対する批判の急先鋒であった。ニューマンはウォードの中に、ニューマン自身がオクスフォードで乗り越えた最悪の福音主義的プロテスタンティズムの偏狭さと不寛容さとを再び体験しているように感じた。

「カトリック教会内でのノヴァティアンやカトリック教会外での国教会の福音主義者のように、あなたは教会の中に教会を作っていると申し上げるのを許していただきたい。彼らは「生きた宗教」、生きた「教義」と言いながら、その派の独特の言葉をつかわなければ「福音を知っている」とは言わせないし、福音の説教者であることを認めないように、あなた方もカトリック教会内に分派を作ろうとし、聖パウロの言葉を借りれば、あなた方の意見を教義にまですること、キリストを分裂させている.... 私はあなたの主義に対してではなく、分裂を引き起こす精神に対して、ここで再び抗議します。」

マシュー・アーノルドも同じ精神を分析する際、「プロバンシアリティ」と表現したこの狭さのために、教会は全ての人々に自らを開かねばならないという使命も果たさなくなってしまう。その代わりに教会は、狭い世界に住んでいながら、広い世界にいると思ひこんでいる人々、外の世界からの挑戦よりもいわゆる「カトリック」的雰囲気好む人々、信徒に聞くことも個人の正しい判断を許容することもできず、ニューマンが繰り返し述べている言葉を使えば「回宗者のために教会を用意できない」人々を産みだしている。

以前から兆しがあり今や確実に到来した暗黒の時代にカトリック思想が隅々まで十全に行きわたるためには、知的な信徒が宗教心に富み、信心深い聖職者が知的であることが必要だと、ニューマンは常々考えていた。彼の大学や学校、オクスフォードの家や『ランブラー』誌への支援などの手段を講じることが、自分の使命だと思っていたが、そうはいかなかった。彼の召命はいっそう偉大なものであった、即ち、カトリック者としての生き方に対する無関心、敵意、迫害、緩慢な是認の体験を通して彼が生涯をかけて培った理想の実現の証人になること、聖人の知性の実践であった。

かつて道徳がグラッドストンやアクトン、アーノルドのような大人物によって実践された時代とは違い、消えゆく確信がおぼろげで表層的な姿にすぎない現代にあっては、聖人のような高潔な性質がとりわけ必要とされている。聖トマス・モアに通じる先見の明で、ニューマンはこのことを見て、感じることができた。彼は内的に深く、熱烈で、高潔な精神の持ち主だったので、タルボットの不正にほとんど肉体的な嫌悪感を示し、ジロウの場合と同様、核心に迫ることができた。

多くのニューマンの写真を見比べてみると、年をとるにつれて彼の姿に苦しみと刻み付けられているのがわかる。その苦しみはキリストのように、魂を救うという根本的に司祭的な決意をした人のものである。信徒は教会の十全性によりいっそう参加すべきという彼の主張によって、かれは司祭的でないのではなくいっそう司祭的であった。1859年の苦しみは、魂の救いを禁じられた羊飼いの苦しみである。この非難の応酬の数か月の間に、彼の批判者がその事件について厳密に考えすぎると非難したもう一人と同様、彼についても「いまや高貴な魂は砕けた」と言える。

しかし、その魂は全てにおいて完全に満たされる御方において、また、司祭と信徒の協力において、また、「夜が明け、明けの明星が心にのぼるまで暗い部屋にランプのように輝く」あの光の証人として、聖職者と信徒が、十

分にしかも成果を度外視して、いっそう一致していこうと決意した教会において満たされるのである。